

2014年5月の金融経済概況のポイント

■景気の基調判断

➤景気判断は据え置き。

—前月の「着実に持ち直している」との判断を継続。

■項目別の変化点

➤住宅投資の判断を下方修正（2か月連続で下方修正。その他項目は据え置き）

項目	5月	4月
住宅投資	弱めに転じ始めている	持ち直しの動きが一服している

■今月の注目点 ～消費増税の景気への影響は限定的

- 消費増税の影響で、3月に山（駆け込み需要）、4～5月に谷（需要の反動減）が発生しています。ただ、増税後の需要の反動減は「予想していたほど大きくない」との見方が多く、山・谷合算で見れば「概ね不変という結果になりそう」との見方が広がりつつあり、中には「プラスになりそう」との声も聞かれます。

—消費増税前は、総じて「山と谷を足し合わせてトントンになれば」との期待感を持ちつつも、「消費増税による景気の下ぶれ懸念が残る」との声が多く聞かれました。

—しかし、増税後2か月经過時点（5月下旬）でみる限り、「増税前後の山・谷を均せばトントンないしプラス」と、想定が“良い方向”に外れる展開になりました。ただ、住宅建設や製材業の一部では「反動減が大」との厳しい見方も聞かれています。

- 今後の景気については、家計の雇用・所得環境の改善基調が続いていることもあって、着実に持ち直していくものとみられます。もっとも、道北では、人手不足、重機不足、トラック・ダンプ不足懸念が一段と強まっており、これが経済活動の阻害要因とならないか、引続き注視が必要です。

■今月の話題～強まる人手不足感

- 景気の緩やかな回復が続く中で、全国では人手不足感が強まっています。道北も、景気の着実な持ち直しに伴い、全国同様、人手不足感が強まる展開になってきました。
 - 日銀短観・道北地区の雇用人員判断 DI（過剰－不足）をみると、昨年未以降、大幅な「不足超」となっています（図表1）。
 - 道北では、「新卒が殆ど取れない」「人手が足りない」「人がいない」等の声が徐々に広がっています。
 - 旭川市内のスーパーでは「営業が出来なくなるピンチです」とのコメントが入った求人広告もみられはじめました（図表2）。
- 人手不足感が強まっている背景は以下の通りです。
 - ①非製造業の好調

景気の着実な持ち直しに伴い、卸小売業、サービス業など非製造業の回復感も鮮明になってきました。非製造業は労働集約型産業ですので、業績回復が労働力不足に繋がりがやすくなっています。

 - 高齢化に伴う介護サービス需要も増加しており、介護ヘルパー等の不足感も強まっています。
 - ②雇用の着実な増加

企業業績の回復に伴い、有効求人倍率が徐々に改善しています。また、雇用保険被保険者数も緩やかな増加が続いており、雇用が緩やかながら着実に増加しています。

 - 過去数年間、雇用拡大を手控えていた建設業、卸小売業も新卒採用に踏み切っていることも、人手不足感につながっています。
 - 旭川の介護・福祉関係の求人は、過去5年で2倍強に膨れ、雇用吸収力では一大産業になっています。
 - 雇用保険の被保険者数（公共職業安定所公表）は、雇用者数の近似値と見做せますが、前年比1%台の伸びが続いています。

因みに、道北地区の4職業安定所（旭川・稚内・北見・網走）管内の被保険者数は16.9万人と、前年同月比1.8千人増加しています。

③人口減少の継続

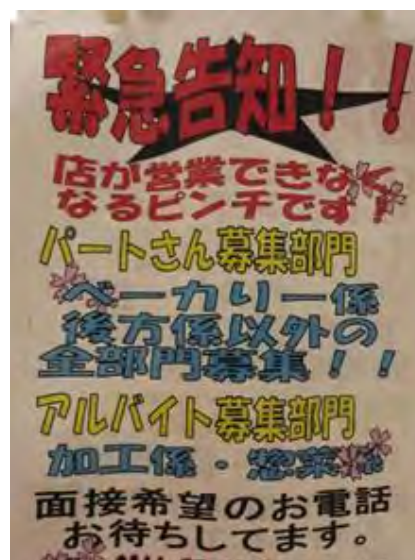
道北地区の人口減少が続いています。道北・主要市のネット転出者（転出者－転入者）は、総人口ベースで年間400～500人のペース、生産年齢人口（15歳～64歳の働き盛りの年齢層）もほぼ同様のペースで減少しています（図表3）。

- 今後、高齢化で現役労働者が徐々に減少することが見込まれる中で、このまま雇用拡大が続けば、ここまで続けてきた「景気の持ち直し」という道筋の先行きに黄信号が灯りかねません。
 - 経済界からは、一部ではありますが「仕事があっても、人手がないので、売上げが増やせない」等、“供給天井”ゆえに経済活動の制約を指摘する声も出始めました。
 - 特に、旭川市は生産年齢人口の減少が大きいだけに、労働力の逼迫感がより一層高まるリスクが大きいことに注意が必要です。
- 道北地区の人口減少が当面避けられないとすれば、女性の社会進出等で労働力不足を補っていくしかありません。保育所の待機児童の削減など、女性の社会進出を促すための取り組みが早急に求められます。

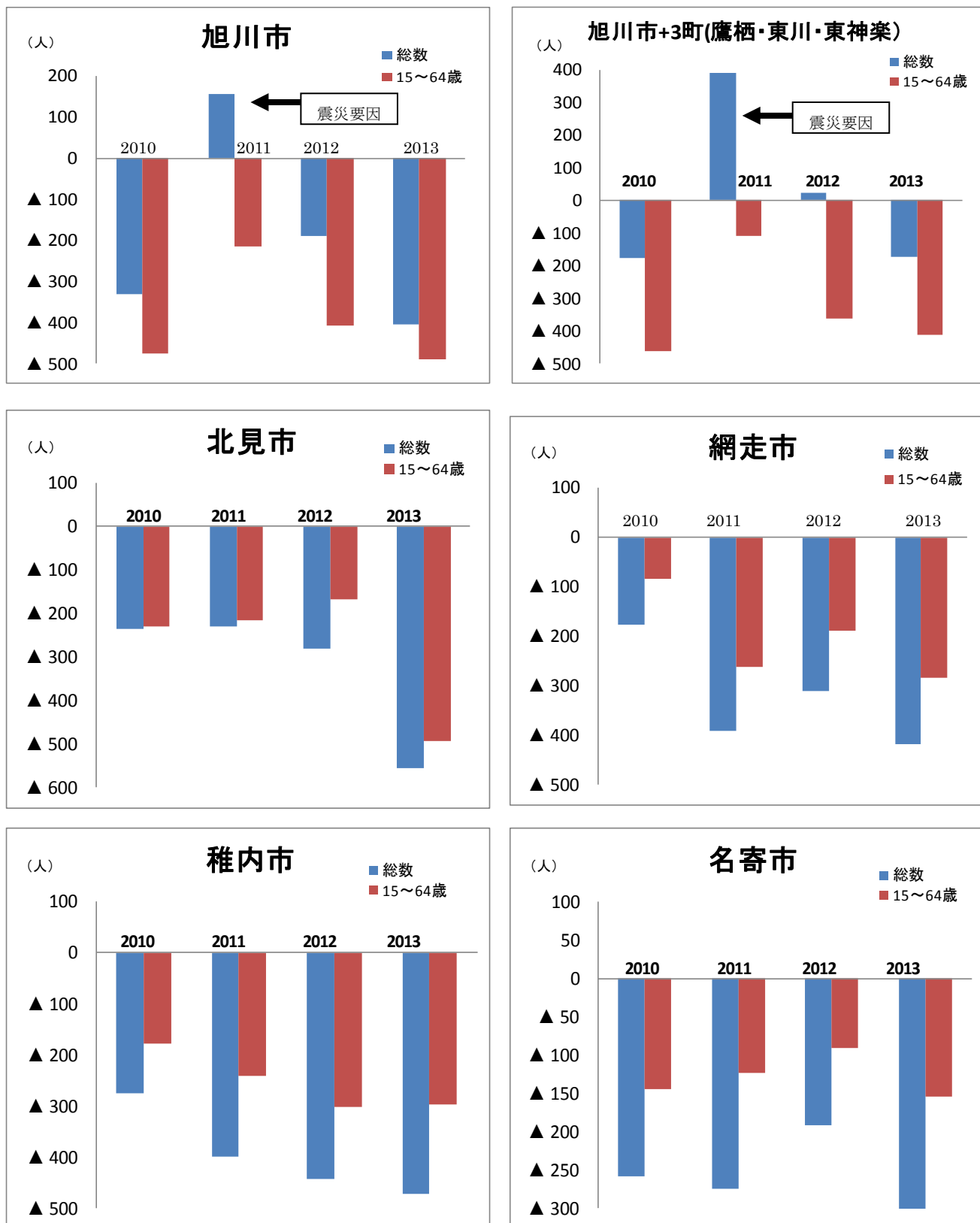
（図表1）雇用人員判断DI（過剰－不足）
＜日銀短観＞

13/3月	▲6
6月	▲8
9月	▲14
12月	▲38
14/3月	▲21
6月(予測)	▲37

（図表2）旭川市内スーパーで掲示されている求人広告



(図表3) 総人口と生産年齢人口(15~64歳)の転出状況



(注) 2011年の旭川の人口をみると一時的に増加しています。これの正確な背景は不明ですが、東北大震災の影響で、東北地区から旭川や周辺3町に一時的な人口流入があったためと推測されます。

【参考】同じ人口減でも、減り方の「質」が異なる「旭川」と「他の主要市」

- 道北の主要5市（旭川・北見・稚内・名寄・網走）は、近年、いずれも人口減少が続いていますが、旭川と他4市とは中身に差がみられます。
- 他4市が総人口、生産年齢人口（15～64歳の働き盛り）がともに減少しています。これに対して、旭川は生産年齢人口の減少が相対的に大きく、市の経済力の衰退度がより強まっています。
—アンパンで例えれば、他4市は「アンパン全体」と「中身のアン」が同時に縮んでいく傾向が続いています。これに対して、旭川は肝心の「アン」がより大きく縮み、中身が抜けたアンパンになりつつあることがわかります。
- 今後は、道北地区は、「街としての魅力」を如何に高めて、人口減少、とりわけ生産年齢人口の減少に歯止めをかけていくかが問われます。特に、旭川については、強い危機意識をもとに、官民あげて、早急に経済活性化に取り組むことが求められます。

人口減少と一口で言っても、中身には差異が...

道北のいずれの市町村も人口が減少



アンパンで言えば、どんどん縮む...

大抵の自治体では総人口(パン)も働き盛り(アン)も緩やかに縮む



外側と芯のアンが、足並みそろえて縮む

旭川は働き盛り(アン)の縮みが速い



芯のアンが、より激しく縮む